

にいたるまで、地理教室の安定と発展にみなみならぬ貢献をされてきた。それは和のために自己を殺す先生の生活信条と、厳正で几帳面な先生の生活態度によるものと私は信じている。

研究面では農業地理学におけるフィールド調査の重要性を身をもって示され、新制大学発足に当たっての気候学の開講や、主任交替後の教育方針に即した地形と土地利用の対応研究例の実践などに、先生の真面目をうかがうことができる。那須で微地形の現地調査に同行して地形面の細分類について論じたり、農家をめぐって労働日誌の回収のお手伝いをしながらききとり調査法を習ったりしたことも、今はなつかしい思い出である。

先生は常に朝早く登学され、講義時間以外は本を読まれたり地図をひろげておられた。床の雑布がけも御自分でなさり、整頓と清潔を旨とされるが、ただきれいにするだけではなく、戸閉り火の元その他安全対策にとくに厳密な注意を払われるのである。近頃では早朝出勤と雑布がけの方はやや緩和されているようだが、さすがにようやくお年令^{とし}のせいかもしれない。

先生と最も長く、最も親しく共にすごし、先生のご心情を誰よりもよく存じあげていると自負する者として、先生のご退官を前にひとことのべずにはいられなかった次第である。

カナダ北極、アクセル・ハイベルグ島のエキスカージョン

式 正 英

1972年7月下旬、コペンハーゲンからモントリオールに向うジェット機は、高々度でグリーンランドの沖合をかすめて飛ぶ。陽光に輝く海波の縮緬模様の中に、いくつもの氷塊が、ゆっくりと南に向かって流れてゆくのが見える。今世紀の初め、悲劇の巨船タイタニック7号を沈めたと同じ氷山が、脚下にあると思いながら固唾をのんだ。それから5日たった7月31日朝、国際地理学会議のブレ・コンgres・エキスカージョンの北極組が、ドルヴァル空港のノルドエアの受付に集った。フランス人7、アメリカ人7、日本人2、カナダ人2、ドイツ人1、イギリス人1の20名の隊員と、隊長のスイス人夫妻、助手の3名の計23名である。ノルドエアはミニ・ジャンボのボーイング737型機で、バフィン島のフロピッシャー・ペー(63°N、バフィン島、アンカレッジより少し北に偏する)を経て、レズリュート基地(75°N、コンワリス島)まで飛ぶ。ウィスキー・ソーダのグラスを傾けながらの快調の旅である。

「あれがモスコクスン(じゃこう牛)だ！」と隊長のフリッツ・ミュラーが叫んだ。レズリュ

トから乗り換えたダグラスDC3型機が、ユーレカ基地(80°N, エルズミアール島)に近づいて高度を下げ始めた時である。黒い大型の動物が10頭ほど、赤茶けた大地のゆるやかな起伏の上に群れている。放牧の牛そっくりであるが、多毛である。名前とは異なり山羊科の動物と云うことだ。その後、何度も見かけたが、ついに近づくことはできなかった。余程用心深い動物なのであろう。

出発してから15時間経った翌日の午前0時30分(モントリオール時間2時30分)、アクセル、ハイベルグ島の観測基地に到着した。ユーレカからは高翼単発のオッター機で、3回に分乗した。ユーレカ水道と1,000m程の峠をこえて飛行機は、山稜や氷河の上をなめる様にして飛んだ。基地飛行場は滑走路のまわりを色褪せた小旗がとりまいているだけの、たゞの粘土の地面である。その上、大型の多角形土の溝が縦横に刻んで凸凹^{でこぼこ}である。ブッシュ・パイロットはそんな所でもまったく鮮やかに着陸してみせる。爆音に驚いて白い小さな形が山の斜面を右往左往する。北極ウサギであった。ウサギは人を恐れることを知らず幾らでも近寄ることができた。

ここにはマクギル大学の極地観測基地があり、10年この方、5月~8月の間だけ自然地理に関する多方面の調査が行われている。出迎えた基地隊員は4名、その1人黒髪黒髭を房々とさせた男は、何と日本人アツム・オームラ氏(チューリッヒ工科大学研究助手)ではないか。意外な所での再会に思わず手を握る。これで日本人3名となり心強いことである。総計27名(うち女性6名)となり、アクセルハイベルグ基地、開設以来の大人口となった。

ウルフ・マウンテンは、急設されたテント場からみて、すぐ北にそり立つ中生代地層の単斜する山体で、その東北側斜面は鋭く研ぎおとされ、さながら狼の牙の様だ。この付近の独り歩きは危ない、狼やポーラー・ベアに会うことがあると注意された。2年ごとにぬけ代るというカモシカの角は、その後エキスカッションの日が重なるにつれ、それぞれのテントの前におかれ、次第にその数を増していった。山の斜面にも、側堆石の麓にも、氷河から融け出す水の流れる河原にも、カモシカは自分の角を落している。

蚊やガガンボの様な昆虫の類がテントの口からよく侵入して来た。スカンジナビアの湖沼地帯を歩いた時には、すさまじい数の蚊や虻の攻撃を受けたが、こゝのは人を刺す程の力はなかった。とも角、エスキモーも住むことのないこの高極の土地に、大型の脊椎動物を初め、多種類の動物がいることは、実際に見て改めて驚かされる。80°Nというと、南極の昭和基地よりも更に極に近く、磁北(レゾリュートのすぐ西にある)より更に北である。南極ではペンギンやアザラシの話は聞くが、この様な多様な動物相の話は聞かない。

この基地の場所は、四囲を1,500mをこえる山地とこれをおおう氷河にかこまれている。西側

に深く入りこんだフィヨルドがあり、湾奥の海岸から9km 内陸にある氷成湖カラー・レークのほとりに基地がある。氷舌は北や東から谷に沿って押し出し、海拔100m位の所に終っている。動物達はどうしてこの様な周囲を閉された場所に棲みつることができるのであろうか。氷河の辺縁の自然はきびしいが、夏の間、水は豊富であり、見通しが好い。見通しに恵まれていることは、足の早い動物には防衛に好都合である。フィヨルドが凍結し、氷河のクレヴァスが新雪に蔽われる季節には、動物達の移動は容易になるだろう。

植物の種類は意外に豊富である。こけや草本ばかりではない。アークティック・ウイロウ（柳の種類）もある。併しそれは地をはってあり、おぼろげの莖ほどの幹の太さで、殆んど立ちあがりを見せていない。このことは8月10日にこゝを去るまでの生活で、自らの人間の身長のために、全く身のおき所がなかったという経験に通じている。

生活の空間に蔭のないことは不便なものである。その上、北極の夏は全く夜蔭がない。夜中も常に陽光と青空のもとである。曇天の日も、陽は高い。日常の生活は、言ってみれば蔭を利用する生活であることを痛切に感じた。小用を足したくても常にかくれる所がない。せめて100m位離れた所まで歩いて、背を向けて用を足す。その位の距離では救いにならないのだが、せめて最低の礼儀なのである。

北極では氷期が終ってしまったのではない。氷期のマキシマム以後縮少をつづける氷床が、未だそこに残っている。氷河を砦とする動物相がその周縁に棲みつぎ始め、これを追って人類が北上している図式を如実に知ることができる。実際、ユーレカでは石油の試掘に成功し、これをパイプラインで運ぶことが、さかんに論議されている。

（1972年9月28日）

15年振りのニューヨーク

正井 泰夫

1972年8月下旬、私は正に15年振りにアメリカのニューヨークを訪れた。1957年12月、ちょうどクリスマスのころに、当時留学中であったミシガン州のイーストランシングから、高速道路を突走って、世界経済の中心であるニューヨークを見ることができた。それからもう15年もたってしまった。